

今田さん(県立大)最優秀

ことなどが、染色の道に進むきっかけとなった。同市立短大、同大専攻科を経て県立大大学院に進学。生地にろうを塗ってその部分が染まらないようにする「ろう染め」技法を磨くとともに、粒子の大きさがさまざまだる岩絵の具を取り入れ、布の上でさらつきなどを表現して自らの世界観を

第3回全国大学選抜染色作品展

若手染色作家を対象にした「第3回全国大学選抜染色作品展」の最優秀賞に、県立大工芸工業デザイン学科助手の今田千裕さん(25)＝倉敷市真備町有井

＝の「身に憶う」が輝いた。タペストリー9枚で構成したインスタレーション(空間芸術)で、県関係者の最高賞受賞は初めて。(山内悠記子)

薄いシルクオーガンジー(一枚縦2.3m、横90cm)の上をろうを置き、その周囲に日本画などで用いる顔料・岩絵の具を振りかけるようにして網の目や輪を思わせる模様を表現。「記憶の揺らぎや、記憶をたどる際に脳内に広がる神経細胞の繊細な動きを表した」という。それを1列3枚の3列に並べ、赤や紫色の後ろの柄が透けて見えるような重層的な作品に仕上げた。

空間芸術 記憶の揺らぎ表現

今田さんは倉敷市真備町地区出身。絵画を専攻していた総社南高3年生の時、やかげ郷土美術館(天掛町)で開かれた染色工芸家久保田一竹氏(1917～2003年)の個展を訪れ、国内外で高く評価される繊細で絢爛な作品世界に触れた。今田さんは「これから染めを中心にした新しい表現を見つけ、作品づくりを続けたい」と意気込んでいる。作品は染・清流館で18日まで公開されている。



染色作家の今田千裕さん。「織器や細胞」をテーマにデザインを追求している



ろう染め技法や岩絵の具を用いた表現が評価され、最優秀賞に輝いた今田さんの「身に憶う」(染・清流館提供)

山陽新聞社提供

掲載の記事・写真及び、図版の無断転記を禁じます。